

# 精神障害者から見た人々

広田和子 精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

Vol.2

かつて私は主治医に「文章を書くのが好き」と語っていたところ、それが病状としてとらえられていた時代もあった。インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。現在も毎日11錠の向精神薬をのまないで眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。

東京都 新聞記者 築山英司さん(36歳)

神奈川県職員から「こちら、精神障害者でバンド活動もしている広田さん！」と90(平2)年夏に紹介されたのが築山記者との初めての出会いだった。

築山君は「今度バンドの練習日におじゃましていいですか」と聞いたので、私は「どうぞ」といった。そして、練習日にカメラを肩からさげた築山君が「こんにちほ！」とさわやかに登場した。私は「ちょっと！ 写真を撮るつもり？ まさか取材じゃないわよね」といった。

築山君は「取材のつもりで来ましたがいけなかったでしょうか？」といったので、私は「あなた、今までに精神障害者取材した経験はあるの？」と聞いた。築山君は「いいえ、新米記者でして、精神障害者に会ったのは、広田さんが初めてです」と答えた。

「来てくれたのはありがたいけど、私たちのこと何も知らないで、いきなり取材といっても、それは困ります」

と私はいった。築山君は「じゃあ、今日はみなさんのお話を伺い、勉強させていただきたいのですが」といったので、私がメンバーに聞くとみな了承した。

こうして築山君は練習の合間に、メンバーの話聞いて「広田さん！ とても勉強になりました。あらためてぜひ取材させていただきたいのですが？」といった。私は「わかりました。ていねいに話も聞いてもらったので、次回は…で出演しますから、その時にでも」とメンバーの意見を聞いて答えた。

9月15日、司会の私は取材されていることを意識しないで生出演を終えたが、築山君が「ところで、広田さん、仮名がいいですか？ 実名でもいいですか？」と聞いた。その言葉に私は驚き、「えー！ 写真が出て、バンド活動が記事になるのに、なんで仮名なの？」といった。

やがて新聞が送られてきたが、名前は仮名になっていた。築山君は長い手紙に「私は実名で、と強く主張しましたが、力がなくて…」と書いてきた。後日、横浜支局の近くへ出かけた私は、ついでに築山君を訪ねた。「広田と申しますが、築山君いますか？」と私は言った。

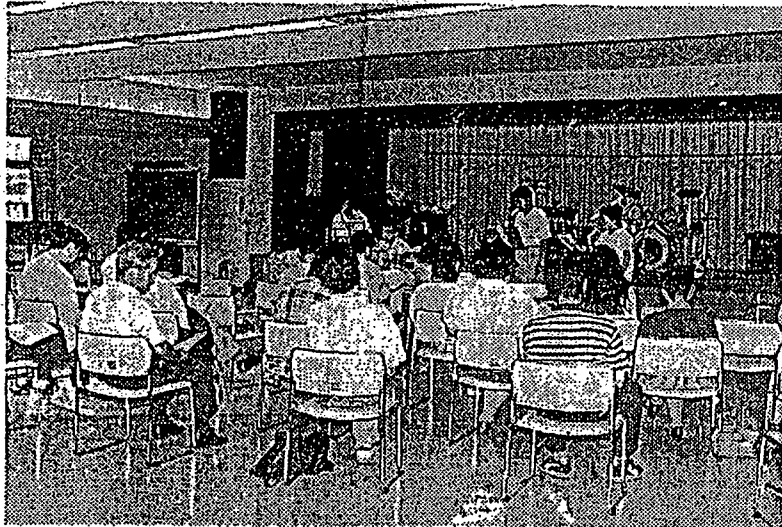
中年の男性が「私、支局長の田中です。実は、あなたのことを築山がデスクに、実名で」と強く主張していました」といった。私は「…なぜ仮名だったのですか？」と聞いた。支局長は「だって実名を出したら、なぜ精神障害者を実名で出しちゃったの」と読者に思われてしまうじゃないですか。ところで広田さん、築山は見込みのある奴ですから、育ててやってください」といった。

翌日、築山君から電話をもらったので「おたくの田中さんは…精神障害者に対してはとんでもない偏見の持ち主ね」というと「支局長を責めるのは酷ですよ。実はあの記事は、東京本社で論議した結果です」と教えてくれた。

その後、築山君の希望で精神科病院を案内したこともあり、転勤後もずっと築山君は精神障害者の問題に関心を持ってくれている。築山君の「仮名記事」がなければ、私はマスコミの偏見に気づかなかったが、その偏見をつくり出しているのが、精神科救急の未整備など精神障害者施策の貧困さだと今では痛感している。出会いから11年後の昨年12月、私は東京新聞の「この人」に載った。書き手は厚生労働省記者会の築山記者。

# 贈る言葉に思いを込めて

## 心風



サンライフ横浜の「コンサート」。雨のなか  
三十人ほどが集まった。横浜市戸塚区で

音楽好きの、どこにでもありそうな平凡なサークル。だが彼らの演奏には、自らの人生の賛歌と闘いの思いが込められ、聴く人の心を動かさずにはいられない。その名は「サンライフ横浜」。おそろくは他に例の少ない精神障害者の音楽

サークルだ。彼らは燃えていた。ギター、フルートの生演奏で「贈る言葉」、ジャズのスタンダード曲「オール・オブ・ミー」など十曲を演奏。集まった三十人が一緒に歌い、手拍子で合わせるなど、二時間のステージは盛り上がった。

バンド結成は三年前の夏。県内の精神障害者作業所の合同キャンプでギター「こめんなさい」と素直な。あなたは障害のことがわかっていない」「そんなには軽はずみに言うな。あんたは障害のことがわかっていない」

「このバンドがよく歌う曲の中に「贈る言葉」がある。この歌は武田鉄矢さんが私たちの気持ちを代わりに歌ってくれたような気がします。例えば自分が障害を持っていることを親しくなった人にいつ話すか非常に悩みます。信じて話したり逆に遠ざかる人もいます。でも私たちは歌の言葉の方を選びたい」——A子

## 明るく羽ばたく 障害者のバンド

やフルートを持ってきた十人が即席で「戦争を知らない子供たち」などを演奏、一緒に歌って好評だったのがきっかけだ。以来年齢、職場の垣根をこえて音楽好きが集まり、今では十六人。その原私たちは、陰口に對してなかなか反論できないもの。「私たちは周囲からの同情や気遣いはイヤ。私たちももっと強くならんか」と

「雨の日で足元が危ないですから、滑って転んで体と精神の二重障害者になったから大変。気をつけましょ」と軽い調子でしゃべった。その直後のことだ。烈火のごとく怒った身体障害者が舞台上に詰め寄った。「そんなに軽はずみに言うな。あんたは障害のことがわかっていない」

「こめんなさい」と素直に頭を下げるA子さん。彼が怒りをぶちまけて帰った歌った。信じてくれぬと嘆くよりも人を信じて傷つく方がいい。

サンライフ横浜は十月六日も桜木町駅前の健康福祉会館のステージに立つ。もちろん「贈る言葉」も歌ったつもりだ。

(築)